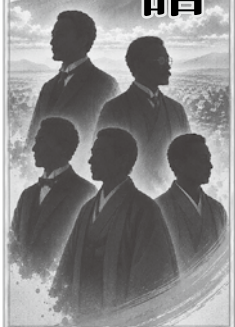


甲斐の系譜

新時代を拓いた
郷土の先人たち

山梨県は日本の近代化に大きく貢献した偉人を数多く輩出している。自主性、公共性、開拓精神という甲州人の気風に基づいた先人たちの挑戦と功績を紹介する。

甲州財閥
雨宮敬次郎
（1846―1911）「雨宮敬次郎肖像」
（明治29年刊行「仲買人雑誌 第2号」出典）

公益目指す実業家へ

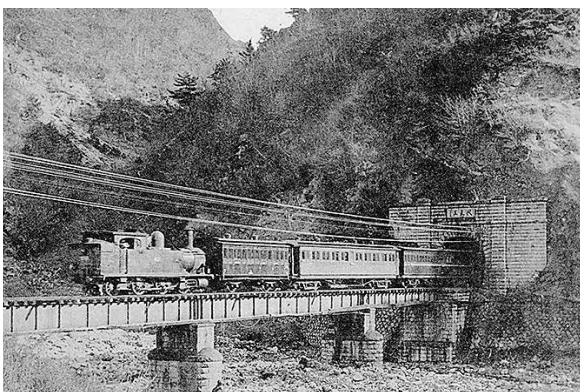
甲州財閥の一人で、「天下の雨敬」と呼ばれた雨宮敬次郎は、弘化3（1846）年、山梨郡牛久保村（現甲州市牛久保）の名主の次男として生まれた。

10代半ばで、当時まだなかった卵専門の商いから商売を始め、生糸などの行商

を見学した。一方、イタリアでは蚕種の売買に失敗。無一文となって帰国した。

事業の失敗と成功を繰り返した雨宮は「投機界の魔王」とも称されたが、やがて海外での知見を持ち前の先見性、開拓精神を生かし、世の中に必要とされる公益性の高い事業を目指す実業家へと成長した。周囲からの支援を得ずに自ら稼いだ財産のほとんどを事業に投資する信念と覚悟を持っていたという。

特に、鉄道こそが国と国民を豊かにする社会事業と位置付け、多くの鉄道事業の創立や経営に関与した。「鉄道王」と呼ばれた甲州財閥・根津嘉一郎には「事業は政治よりも生命がある」と語り、「岩倉具視公の

笹子隧道と当時の列車
（明治末期ごろ）

（現JR東北・高崎線）は、日本鉄道の在る限り人の視聴から湮滅することはないと述べた。

中央線開通に尽力

鉄道事業で近代化を推進

「初めて」に挑んだ豪傑

由でイタリアへ。米国では鉄道に乗り、大規模な牧場や小麦粉の輸出会社など

如き大政治家も、政治に於ける功績は時と共に消滅するが、その興した日本鉄道

「山梨の発展には甲府まで延伸することが不可欠だ」と考え、国に先んじて「山梨

鉄道案」を主張。しかし、国からの許可が得られず、中央線は国の公債で建設され、同36（1903）年、八王子―甲府間が開通した。

ただ、甲府までのルートは、かつて雨宮が構想したものとはほぼ同じだった。

その3年後、鉄道国有法の公布により、甲武鉄道は国有化された。それ以前から雨宮が訴えていた「鉄道国有論」が実現することとなった。事業を通じて社会基盤をつくるという公共性の高い考え方を持っていた。

また、静岡・熱海の人力による人車鉄道や、迅速に敷設できる「軽便鉄道」を数多く手がけたほか、現在も走る京浜電鉄、江ノ島電鉄などの社長も歴任し、地方の鉄道普及にも尽力した。

製粉・製鉄事業にも

当時の日本にとって最初となる事業にも多数参画した。米国から製粉機を買い寄せ、同12（1879）年、東京・深川に機械製粉会社「泰靖社」（現ニッポン）を創立。さらに同40（1907）年には、車両メーカー「雨宮鉄工所」を創設するなど、常に時代の先を見据え、日本の近代化の礎



中央線開通にぎわう様子を描いた「甲府停車場開通式」（いずれも県立博物館蔵）

を築いた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

軽井沢を開拓

「木の貯金」で観光地へ

雨宮は長野・軽井沢の開拓にも取り組んだ。30代半ばで結核に罹患したことをきっかけに、自らの死後を見据えた投資を強く意識するようになったという。不毛の地とされた軽井沢を開墾することで人々の生活に希望を与えようと、同16（1886）年から開墾事業を行った。植林事業では、「木の貯金」として毎年数十万本のカラマツを植え続けた。現在は700万本もの美しい林を形成し、避暑地・軽井沢として多くの観光客を迎えている。

また、雨宮は軽井沢の中心に位置する離山の麓に邸宅を建設。「雨宮御殿」と呼ばれ、明治末期には新座敷を建設し、政財界の賓客を迎えた。町内には「雨宮新田」という地名も存在し、雨宮とのつながりを現代に伝えている。

偉人の言葉

事業は政治よりも生命がある